

ひとえぐさの養殖試験

1. 趣 旨

ひとえぐさは琉球沿岸の河水の影響を受ける岩礁地帯には自然に繁茂して、住民はこれを摘採して殆んど豆腐汁に利用されて来たが、最近佃煮原料として日本本土に輸送され需要が次第に高まりつゝあるので、本試験を行つて浅海を有効に利用して優良品を生産し漁村の冬季の副産物として普及を図りたい。

2. 場 所

佐敷村馬天湾内佐敷村兼久地先（別紙図面参照）

3. 時 期

1955年11月7日開始、同年12月施設撤去。

4. 方 法

水平網罟法によることにし、網は椰子セシイ製1.5分径2子懸で5寸目掛とし同じく椰子セシイ製2子懸3分5厘径網を縁網とし網巾を5尺にして別に5尺切1寸径の竹を横に平行に5尺毎に取付け浮とした。浮竹の取付部から耳懸（縁網と同大）を環状に出し、杭に張り負四隅の耳懸は長目にし7尺毎にした浮竹を取付して両端の杭に張り渡し、張り役目と浮の役目をなさしめる様にした。

網張用の杭は末口1寸5分から3寸位の6尺ものを用ひ、海底に2尺打ち込み海底から1尺〜3尺上下出来る様にして網を張り渡して（構造取付図別紙の通り）稚苗着生成長を見ることにした。

5. 経 過

11月初旬1組を敷設し更に1潮時を経つてから敷設して時季別による稚苗の附着状況の優劣を確かめるべく2組準備してあつたが11月に入つて急に気温が降り、水温も低下したので11月7日2組同時に敷設した。

干出時間及管理、杭の打込み易いこと等を念頭に置いて上記の場所を選定して敷設したのであるが、1週間位は何等稚子の着生の模様も認められず15日位から網及杭等緑色を呈し赤藻類の胞子らしきものが着いていたので成長を待たしたのであるが該所は北風になると波浪高く杭が抜かれることが多かつた。それでもその都度建てなおして経過を見ることにしたが、12月19日スクラップ採集業者の沈船解体の原油が附近一帯に漂上しそのため施設にも原油が附着し先きの見込も立たなかつたので結果を見ることをしに施設を撤去した。

4. 反 省

今回は場所選定するとき、露出時間を3時間とし着視のきくところ、杭の立て易いこと等を念頭において決定したため、岸より離れ過ぎ波浪が強く場所の選定を誤つたことを感じた。



